

# 感性と表現力を育み、共感性を高めるフォト ポエムの創作・鑑賞指導の在り方の研究

～学校・地域の絆を深める大人と子どものフォトポエム鑑賞を通して～

フォトポエム 感性 表現力 共感性 地域人材活用

松山市立椿小学校

〒790-0941  
愛媛県松山市和泉南6丁目1-47

<http://tsubaki-e.esnet.ed.jp/>

## 1. 研究の背景

近年、スマートフォン等の普及に伴い、映像と言葉等を組み合わせたマルチモーダル・テキストによるコミュニケーションが日常的に行われるようになってきた。これからの情報社会を生きる子どもたちにとって、マルチモーダル・テキストの特質を生かした表現力は必要不可欠なスキルである。

フォトポエムは、写真と言葉を組み合わせたマルチモーダル・テキストであり、「見立て」を中心とした、通常の間接的関係を転位させる隠喩的手法が特徴的に見られる表現活動である。写真を活用することで、今まで無意識に感じていた発見や感動を顕在化し、そこから言葉を紡ぎだすことができる。さらに、受け手は写真からイメージを補完し、言葉からより想像を膨らませることができる。また、写真と言葉の非類似性が大きいほど、重層的な意味解釈をすることができる。

松山市は、正岡子規や夏目漱石のゆかりの地である。今年、正岡子規、夏目漱石の生誕150周年記念でもあり、文学関連の活動がより一層力を入れて行われる。本校区でも、地域の俳句グループの働きかけで、全校児童が俳句活動に取り組み、通学路には小学生から大人までの様々な作品が飾られているなど、俳句文化が根付いている。

俳句は、文字数が著しく制限されているために省略や飛躍が多く、意味の隙間を読み手自身が埋める必要があり、個人のもつ知識や体験の量や深さが求められる。そのため、年齢が低くなるほど俳句の創作と鑑賞を楽しむことが難しくなる。そこで、個人の知識や体験の量を補完するために写真の活用を行うフォト俳句の指導法の開発を目指す。フォト俳句で表現することにより、児童と保護者・地域による幅広い年齢層での作品鑑賞会が実施可能となる。このような、フォトポエムやフォト俳句の創作を通して、児童の感性や表現力、及び、共感性は育まれていくと考える。感情や想像を言葉にする力の育成や、社会に開かれた学校での学びは、新学習指導要領で重視されている事柄でもある。そして、地域性を生かし、松山の文学の町としての文化の発展に寄与する研究になりうると考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、地域の俳句文化を生かしたフォト俳句の創作・鑑賞活動の指導法の開発を行うことである。さらに、フォトポエム及びフォト俳句の創作・鑑賞活動を通して、児童の感性や表現力に関する学習効果や、児童の共感性に関する意識の変容を明らかにすることである。

### 3. 研究の経過

#### (1) フォト俳句の創作・鑑賞活動の開発

時期	取り組み内容	評価のための記録
5月	研究計画立案	
6月	地域人材とのフォト俳句創作に関する検討会1	検討会記録(担当者等)
7月	フォト俳句創作・鑑賞活動立案	
8月	地域人材とのフォト俳句創作に関する検討会2	検討会記録(担当者等)
9月	地域人材とのフォト俳句創作に関する検討会3	検討会記録(担当者等)
9月	6年生俳句教室(地域人材)	観察・記録(児童)
9月	地域人材とのフォト俳句創作に関する検討会4	検討会記録(担当者等)
10月	3年生フォト俳句写真撮影・フォト俳句創作	観察記録・作品(児童)
11月	地域人材とのフォト俳句創作に関する検討会5	検討会記録(担当者等)
11月	フォト俳句全校アンケート(フォト俳句の創作・鑑賞)	アンケート結果
	地域人材とのフォト俳句創作に関する検討会6	
	フォト俳句鑑賞会	観察・記録(児童)
	フォト俳句鑑賞会事後アンケート調査	アンケート(児童)
	地域人材とのフォト俳句創作に関する検討会7	
3月	フォトブック作成・地域関係団体への配布	作品
3月	今年度の研究成果等の検討	成果報告書

#### (2) フォトポエムの創作・鑑賞活動の学習効果の検証

表2 フォトポエムの		
時期	取り組み内容	評価のための記録
7月	フォトポエム(俳句)校内研修	教師の所感(発言記録)
9月	3年生の表現に関する意識調査	アンケート(3年生)
9月	3年生フォトポエム創作・鑑賞	観察記録・作品(児童)
9月	フォトポエム校内研究授業 訪問アドバイス 国立教育政策研究所 総括研究官 福本 徹 先生	授業参観・記録・研究協議
9月	3年生フォトポエム制作に関する事後アンケート	アンケート(3年生)
3月	フォトポエムの学習効果の検証	作品分析

### 4. 代表的な実践

#### (1) フォト俳句の創作・鑑賞活動

##### ① 地域人材とのフォト俳句創作に関する検討会

本活動は過去に前例がない。全校児童、保護者、地域が関わる鑑賞会をどのように運営していけばよいのか、また、どのような形で創作活動を行い、全校児童が関わっていけばよいのか、さらには、どの学年がどの単元でどのくらいの時数で活動していけばよいのか、その基準となるノウハウが存在しない。そこで、フォト俳句の創作経験がある地域の俳人キム・チャンヒ氏に企画段階から参画してもらい、検討会を合計7回行った。

##### ② 6年生の俳句創作

国語科の俳句の単元活動として、9月26日(火)に、キム氏を講師として招き、6年生5学級(143名)を対象とした俳句教室を開催した(図1)。まず、俳句は次の4つのステップで創作する。①最近の学校の出来事(明るい・暗い・どちらでもない)を選択する②その出来事に関する言葉(ものやこと)を書き出す③書き出した言葉を12音でまとめる④自分の気持ちにぴったり合う季語を選択する。次に、創作した俳句から「自分たちのクラスらしい」学級代表の俳句を1点選ぶ。最後に、学級代表の5つの作品を6年生全員で鑑賞する。



図1 俳句教室の様子

③ 3年生の写真の撮影・フォト俳句作り

3年生（151名）は、6年生の5つの代表作品から自分の好きな作品を選択する。作品ごとに3～4人のグループを作り、俳句に合う写真を撮影する（図2）。6年生の俳句から想像した様子を再現するために、写真の構図をグループで考える。最後に、タブレット端末を活用し、撮影した写真に6年生の俳句を組み合わせて、フォト俳句を完成させる。



図2 写真撮影の様子

④ フォト俳句代表作品の決定

各クラスで完成したフォト俳句の作品から、6年生の5つの作品に対して学級代表作品を1作品ずつ決定する。選ばれた25作品（5作品×5学級）を今度は、1・2・4・5・6年の各クラスで人気投票をし、俳句の種類ごとに代表作品を選び、計5作品を椿小代表作品として決定する。創作に関わらない他学年の児童も、投票することで活動への参加意識や、どの作品が選ばれるのかという興味関心を高めることができる。

⑤ 全校児童と保護者・地域の方々を行うフォト俳句鑑賞会

人気投票により選ばれた5つの作品の鑑賞会を、全校児童と保護者・地域の方々で鑑賞会を行う。キム氏がコーディネーターを、地域の俳句団体の代表2名がコメンテーターを担当する。俳句と写真が組み合わさっているため、低学年でもフォト俳句の作品の良さを語るができる。高学年は、写真と言葉の関係のよさについても考えることができていた。最後に、この鑑賞会に参加しているみんなで、一番椿小学校らしい作品を拍手の大きさで決定する。（図3）。



図3 最優秀に選ばれた作品

(2) フォトポエムの創作・鑑賞活動の学習効果の検証

① フォトポエムの創作活動

フォトポエムの学習効果として次の3点が期待される。一つ目が、写真を撮影することにより、撮影した時の自分の感動や発見を意識化したり、写真を見直すことで新たな発見をしたりすることができることである。二つ目は、表現した言葉と自分の思いがぴったりと重なるかどうか、写真を介して言葉と思いを往復させながら言葉を吟味することができることである。三つ目は、フォトポエムには、写真の撮り方のよさ、詩の言語表現のよさ、写真と詩の組み合わせ方のデザインのよさという、大きく3つの評価の観点があるため、多様な観点で感性や表現を認め合うことができることである。

ア 写真撮影での指導の工夫

3年生の児童はフォトポエムの創作経験はない。そのため、学習の導入でフォトポエムがどのようなものなのかを理解させる必要がある。過去の参考作品を見せ、フォトポエムのイメージを持たせる。児童一人一人がもつもの見方に影響が及ばないように、参考作品は他学年が作成した作品1点のみとした。その際に、写真を撮影するときに、カメラの高さを変える、角度を変える、近づいて大きくとる（焦点化）という撮影するときのこつを伝えた。写真撮影の時には「椿小のあっ・はっ・おっをパチリととろう」という、「あっ」という驚き、「はっ」とする瞬間、「おっ」思う発見をカメラに撮影しようというテーマをもたせ撮影に臨ませた。

## イ 詩の創作場面

まず、撮影した写真から一番のお気に入りの写真を選択させる。次に、写真から思いついた言葉を付箋に書かせる。最後に付箋を並べて、詩の形に整える。付箋に書かせることで、文字数が制限され言葉自体も短い語句の集まりとなる。さらに、それを並べることで自然に詩の改行形式を形作ることができる(図4)。さらに、

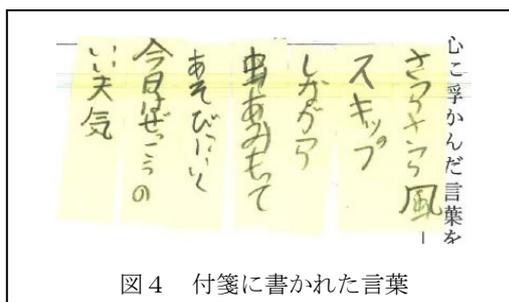


図4 付箋に書かれた言葉

この言葉を並べる段階で、言葉に出して読んだり、写真の内容読み取ったりしながら、使う言葉を吟味する。言葉の吟味は、写真と詩を組み合わせる活動でも行われる。

## ウ 写真と詩の組み合わせ

タブレット端末のプレゼンテーションソフトを活用して、写真と詩を組み合わせる。ローマ字を習っていない段階であったので、手書き文字入力機能を活用して詩を入力する。さらに、フォント・文字の大きさ・文字色、及び、文字の配置場所などを考えながら、自分の思いに合ったデザインを考えさせる。文字入力体験が少ないので、文字変換と改行方法については、丁寧に説明する必要がある。



図5 完成したフォトポエム

このようにして作られた作品(図5)を見ると、不要な言葉を省略し、反復や体言止めなどの技法を活用するなど、表現の工夫がなされていることが分かる。

## エ 評価活動(鑑賞活動)

できあがった作品を相互評価する。友達の作品のよさを付箋に書いて張っていく。その後、学級全体で作品のよさについて共有するなかで、鑑賞の観点についての理解を深めていく。

### ② フォトポエムの学習効果の検証

3年生の1学級(30名:男子17名・女子13名)を対象として、創作されたフォトポエムの作品から学習効果を検証する。児童の感性や表現力に関する学習効果を測る視点は、次のように定める(表1)。小・中・高等学校の国語科学習指導要領には、創作の楽しさやものの見方や感性を豊かにするという内容が段階を追って書かれている。フォトポエムにおいて、児童のものの見方は写真の切り取り方に大きく表れる。また、切り取った対象物を見立てたり、なりきったりといった日常の設定を非日常的なイメージに転位させるところに、フォトポエムならではの特徴的なものの見方や感性が現れると考える。そこで、撮影技法と詩的認識力の2つの観点で感性を測る。

表現力については、小学校学習指導要領の言語活動例に示されている内容を参照し、①改行形式で書くことができている②表現技法を工夫している(3年生が活用する表現として、擬人化や体言止めを追加した)③構成上の工夫ができている、という3観点で表現力を測る。この観点も用いて30作品を一作品ごとに質的分析を行う。それぞれの観点で具体的に定めた内容に合致する点が1点以上あれば、その観点に対して学習効果が見られたと判断する。

感性	撮影技法	写真撮影における視点高さ、角度の工夫、及び、焦点化を行なっている。
	詩的認識力	対象物を別のものに見立てている。 対象物になりきって考えている。
表現力	改行形式	改行形式や連による構成を理解し活用できている。
	技法	擬声語、擬態語、語句の反復、誇張、比喻（直喩・隠喩）、ユーモア、及び、擬人化、体言止めのうちいずれかが活用できている。
	構成	省略、倒置、対句が活用できている。

## 5. 研究の成果

感性と表現力を育み、共感性を高めるフォトポエムの創作・鑑賞指導の在り方について研究実践を行ってきた。その結果、フォト俳句の創作・鑑賞活動という新しい教育活動のモデル開発をすることができたと考える。その中で、児童の共感性の高まりも示唆された。また、フォトポエムの創作では、児童の表現意欲の向上が認められ、感性や表現力に関する発想や技法が活用されていることも明らかとなった。

### (1) フォト俳句の創作・鑑賞活動の開発に関して

鑑賞活動後に、全校児童を対象にしたアンケートでは、1～6年生の約90%がフォト俳句鑑賞会について楽しかったと感じていることが分かった。創作に関わっていない1・2・4・5年生の約90%が、作品のいいところを見つけることができたと感じている。また、3・6年生の約80%が前よりも俳句を作ることが好きになったと感じていること、約85%が、前よりも作品に込められた思いを想像したり、作品から想像を膨らませたりするようになったと考えていることが明らかとなった。これらの結果から、フォト俳句の創作・鑑賞の活動を通して、本校児童は表現することや共感的に作品を読み取ることの楽しさを感じることができたと考える。さらに、作品の読み取りにおける共感性が、活動を通して高まったことが示唆された。

また、学年部ごとに教員でフォト俳句の創作鑑賞活動の成果と課題を評議した。その結果、全校児童で作品鑑賞ができたことに肯定的な意見が多数挙げられた。キム氏も、地域を交えた鑑賞会の教育的価値を高く評価し、学校文化に根ざす活動にしていくことを期待している。

### (2) フォトポエムの創作・鑑賞活動の学習効果の検証

9月末に3年生の1クラスを対象にした、フォトポエム創作についての事後アンケート調査の結果(表2)から、約90%の児童が、いい写真を撮ったり、いい詩を作ったりすることができたと感じていることが分かる。また、約90%がよく考えて詩を作ることができたと感じていることから、フォトポエムの創作において言葉を吟味したり、表現方法を工夫したりしていたことが推測される。9月初めに行った事前の意識調査では、43%の児童が詩の創作に苦手意識をもっていること、57%が自分が好きではないと感じていることから、表現に対する自信や児童の自尊感情の低さが課題となっていた。その結果と比較すると、フォトポエムの創作活動が、児童の表現に対する自信や意欲によい影響を与えていると考える。

	4	3	2	1	肯定	否定
1 フォトポエムの活動は楽しかったですか	69.0%	17.2%	10.3%	3.4%	86.2%	13.8%
2 いい写真を撮ることができましたか	72.4%	20.7%	6.9%	0.0%	93.1%	6.9%
3 いい詩を作ることができましたか	58.6%	34.5%	6.9%	0.0%	93.1%	6.9%
4 よく考えて詩を作ることができましたか	60.7%	28.6%	0.0%	10.7%	89.3%	10.7%
5 またフォトポエムが作りたいですか？	75.0%	14.3%	7.1%	3.6%	89.3%	10.7%

フォトポエムの作品質的分析を行い、フォトポエムの学習効果について考察する。その結果（表3）から、感性に関する観点では、写真の撮影技法の工夫は87%、詩的認識力に関する発想の発現は67%の

	件数	割合
感性（撮影技法）	26	87%
感性（詩的認識力）	20	67%
表現（改行形式の活用）	30	100%
表現（表現技法の活用）	30	100%
表現（構成技法の活用）	26	87%

作品から認められた。表現力に関する観点では、改行形式の活用は100%、表現技法の活用は100%、構成技法の活用は87%であることが明らかとなった。感性と表現力という大きなカテゴリーでみると、感性では97%、表現力では100%の学習効果が作品から確認された。

これらの結果から、国語科で求められているものの見方や感性を豊かにすることに関して、フォトポエムの創作活動は大変有効であると判断される。

## 6. 今後の課題・展望

来年度は、今年度開発してきたフォト俳句等の学習活動で、身に付けられる力を整理する。そして、これから求められる資質・能力、各教科の目標と内容との整合性を図り、各学年の年間指導計画にしっかりと位置付けていく。今後も、本校地域のよさを生かした教育を展開し、フォト俳句の創作活動を学校文化として根付かせていきたい。

## 7. おわりに

児童の作品を分析すると、詩の表現に言葉だけでは暗喩であることを認識することができないが、写真と組み合わせると写真の対象物の暗喩であることがわかる表現が、11件（全体の37%）あることが確認された。このことから、異なる表現メディアとの関係性に着目した国語教育の在り方について、研究を進める必要があると考える。

## 8. 参考文献

- ・植阪 友理, 光嶋 昭善 (2013) 創作と鑑賞の一体化を取り入れた俳句指導, 教育心理学研究(61)p. 398-411
- ・三浦和尚 2016 国語教育実践の基底 三省堂
- ・増田ゆか, 松山雅子(2012), 表現メディアの違いに着目した中学校国語科実践の考察: 写真と言葉を組み合わせた「ことわざ辞典」の制作を通して, 大阪教育大学紀要 23-39